

# かめのりコミュニティ THE KAMENORI COMMUNITY

公益財団法人 かめのり財団は  
日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて  
未来にわたって各国との友好関係と  
相互理解を促進するとともに その架け橋となる  
グローバル・リーダーの育成を目的に  
事業を行っています

今号の内容

## 連続セミナー 国際交流の新局面

大学院留学アジア奨学生

オンライン夏の研修交流会

国際交流事業助成

オンライン カンボジアスタディツアー

寄稿

非営利組織評価センター(JCNE)による  
第三者評価システムのご紹介

インタビュー

多様な価値観を受け入れる  
新しい社会作りのために

中学生・高校生日本語ビデオコンテスト

No. 38  
NOV. 2021

公益財団法人  
かめのり財団  
Kamenori The Kamenori Foundation

## 連続セミナー 国際交流の新局面

現在、かめのり財団では「国際交流の新局面」と題した全4回のオンライン連続セミナーを開催中です。

私たちは今、国際交流や多文化共生、さらには困窮する在留外国人のための活動を行う団体や事業を支援するとともに、それらの活動を社会へ発信し、今後どのような取り組みが求められるか検討する機会を持つことが期待されています。その期待に応えるため、(1) 青少年の国際交流、(2) 地域における多文化共生や外国人の就労、(3) 国際交流や多文化共生の促進や支援、という3つの領域に焦点を当てたセミナーを企画しました。詳細やお申込み方法は、財団ホームページをご覧ください。後日、各回の抄録や資料も公開予定です。

かめのり財団HP <https://www.kamenori.jp>

各回	日時・テーマ	ご登壇者(法人格略)
第1回	2021年11月24日(水) 16:00-18:00 青少年の国際交流の「これまで」と「これから」	河野淳子氏 (AFS 日本協会) 長澤慶幸氏 (同志社大学国際センター) 伊藤章氏 (国際ボランティア学生協会)
第2回	2021年12月3日(金) 16:00-18:00 地域における多文化共生や 外国人の就労の「これまで」と「これから」	田村太郎氏 (ダイバーシティ研究所) 鈴木江理子氏 (国士館大学教授) 吉水慈豊氏 (日越ともいき支援会)
第3回	2021年12月13日(月) 16:00-18:00 国際交流や多文化共生を支援する 助成プログラムの「これまで」と「これから」	渡邊邦弘氏 (三菱 UFJ 国際財団) 矢富明徳氏 (佐賀県国際交流協会) 松村渉氏 (ひろしま NPO センター)
第4回《総括》	2021年12月14日(火) 16:00-18:00 経過と見通しから、学ぶべきこと・備えるべきこと	川北秀人氏 (IIHOE [人と組織と地球のための国際研究所])

## 大学院留学アジア奨学生 オンライン夏の研修交流会

2021年9月13日・14日の2日間、大学院留学アジア奨学生の夏の研修交流会を、今年もオンラインにて開催しました。

かめのり財団では2007年より、アジアから日本の大学へ留学している大学院生への奨学支援を続けています。その奨学生たちの研究の進捗発表と、相互交流の促進を目的に、毎年夏に日本各地で研修交流会を行ってきました。

コロナ禍による影響で、残念ながら昨年度よりオンライン開催が続いていますが、自粛生活のただ中に行われた今年の研修交流会では、OGの楊慧敏とOBの姜哲敏によるミニ講義も行われ、現役奨学生たちにとって大変有意義なものとなりました。



### 「3年間の夏の研修交流会の振り返り」

文：チッターラーク チャニカー お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科

私は奨学生として2019年度から2021年度まで夏の研修交流会に3回参加しました。2019年度は函館で開催された研修交流会に初参加しました。2020年度と2021年度は2年連続でオンライン開催でした。この3年間を振り返り、感想を以下に述べます。

夏の研修交流会の主な目的は、大学院生による研究発表です。この3年間、私は他の奨学生と一緒に参加し、日本語・日本文化という自分の研究に近い分野をはじめ、法学、社会福祉学、経済学など他分野までたくさんの発表を聞くことができました。発表を通して、皆さんの研究に対する熱心さが非常に伝わってきたと思います。ま

た、西田先生の講義、OB・OGの講義、交流の時間のおかげで、将来の道や人生に対する視野が広がったことに気が付きました。そして、開催形式が対面からオンラインになってしまった状況の中でも、私が最も大事にしてきたことは、参加者との「交流」の時間です。様々な形で奨学生やOB・OGとの交流の時間を過ごしたことで、「研究生生活は決して甘くはないが、周りにいる仲間やかめのりファミリーの存在が元気の源のひとつ」と気が付きました。

今回、奨学生として夏の研修交流会に参加するのは最後になりましたが、またいつかOGとして参加すること、研究で苦労している(だる

う)後輩たちと交流することができる日が来るまで楽しみにしております。その時、必ず彼らに元気をいっぱいを与えて支えたいと思います。



### 「とても楽しかった夏の研修交流会」

文：苗 静茹 東京大学 法学政治学研究科

夏の研修交流会では、久しぶりに皆さんとお会いできました。今年も新型コロナウイルスの関係でオンライン開催となり、一緒に旅行へは行けませんでした。皆さんの元気な顔を見ることができて、なによりでした。

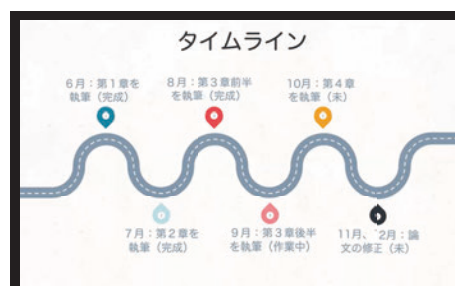
1日目はチャニカーさん、金さん、宜さんと私の発表があり、OGの楊さんから素晴らしいミニ講義も受けました。チャニカーさんの発表では、自分が常に使用している敬語が字面上的の意味以外に、話し方の社会的関係や心理的距離なども表せることを知り、とても勉強になりました。また金さんの発表を通じて、初めて再生エネルギーの欠点を意識し、自分の考えが甘すぎることに気が付きました。宜さんも相変わらず素晴らしい研究を行って、その成果を興味深く聞きました。1日目最後のミニ講義では楊さんが、研究に向かう時の心構えなどいろいろお話してくだ

さって、非常に共感できました。

2日目は孫さん、ドさん、尹さんの発表そしてOBの姜さんのミニ講義がありました。家族または将来の自分の生活と密接に関連している社区養老サービスに関する孫さんの研究、ひとつひとつのイノベーションを保護するための特許制度に関するドさんの研究、そしてどの国の法律でもとても難しい問題である不動産の二重譲渡に

関する尹さんの研究により、楽しみながら色々なことを学びました。加えて、姜さんのミニ講義で普段入手できない情報を多く得ることができ、非常に有意義な2日間を過ごしました。

私にとって今回は最後の夏の研修交流会であって少し残念ですが、かめのりファミリーの一員として皆さんとのご縁は終わらないため、きっといつかまたお会いできると信じています。



## 「オンラインでの夏の研修交流会」

文：孫 心悅 同志社大学 社会学研究科

コロナが収まらない状況の中で、今年の夏の研修交流会もオンラインにて開催されました。私はリーダーとして、皆さんと相談したうえで、スケジュールを整理したり、発表資料を集めて共有したりしました。リーダーの仕事のおかげで、交流会の前にも皆さんとやり取りがあり、常に他の人の都合や好みを優先する皆さんのやさしさと温かさに触れることができました。

夏の研修交流会を通して、皆さんの異なる分野の研究を聞いて、自分の視野が広がりました。異なる分野から集まった皆さんはそれぞれ独自の視点を持っており、ずっと同じ道をたどっている自分の研究に示唆を与えてくれました。また、自分の研究をわかりやすく伝えることが非常に重要で、交流会をきっかけに、自分の研究を全然知らない皆さんに説明することを通して、研究の筋を再度整理し、自分の発表力と説明力を訓

練するいい機会だったと思います。皆さんの発表を聞くことで、いろいろと勉強になった一方で、自分の研究にどのような意義があるかを改めて考えることができました。そして、今年は新たにフリータイムが設けられたことで、皆さんと深く交流でき、オンラインであっても、研究生活上の悩み等を皆さんと共有できる場になりました。そのような場を通して、自分だけの悩みで

はないことがわかり、安心すると同時に、貴重な意見もいただけました。

コロナの関係で、対面で皆さんと交流することができませんが、人と人の絆は空間により制限されるものではないため、皆さんとの間に築かれたネットワークの縁を大事にしていきたいと思っています。



## 国際交流事業助成 緊急支援助成決定

### 緊急支援プロジェクト助成







昨年から続く新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により、いまだ国際交流事業が実施できない状況が続く中、その再開を見据え、本年度は日本国内でCOVID-19によってさらに深刻化した課題や、新たに生じた課題に

立ち向かう活動を、緊急的に助成することとしました。

そこでテーマを「多文化共生社会を目指して～今日に暮らす外国人の方々に必要な取組とは～」とし、日本に居住するアジア・オセアニア

出身の外国人やその人々が暮らす地域の抱える課題に取り組む活動を支援するために公募しました。その結果、17団体から総額6,971万3千円の申請が寄せられました。助成審査委員会による審査の結果、7団体に計3,270万8千円の助成が決定しました。採択された事業は、次年度まで継続する2カ年事業であることから、今年度末には事業の経過及び見込みについての報告を受けることになっています。

#### 緊急支援プロジェクト助成 採用団体一覧

団体名	事業名	活動地域
 認定特定非営利活動法人 ふじみの国際交流センター	コロナ禍で職を失い、生活困窮に陥っている外国人の就職活動と、生活の安定に向けた支援	埼玉県ふじみ野市
— 一般社団法人 多文化共生コスモ越谷	COVID-19 禍における在住外国人の就労支援とワクチン接種に関する事業	埼玉県東部及び中央地区
 一般社団法人 YOU MAKE IT	COVID-19 の影響を受け、生活が困窮する福岡在住留学生に対する食料支援と相談を通じた調査および情報発信事業	福岡県内及び近隣県
 特定非営利活動法人 名古屋難民支援室	東海地域に暮らす難民のコロナ禍における困窮・孤立防止のケースワーク及び実態調査事業	愛知県名古屋市中心とした東海地域
 松山さかのうえ日本語学校	国際子ども食堂を通じた多文化共生プロジェクト	愛媛県松山市
 特定非営利活動法人 地球市民の会	外国人住民の生活全般を支えるセーフティネット構築事業	九州
 公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会	生活・法的支援による包括的生活安定支援	東京豊島区及びその周辺

### 留学生緊急支援金

昨年度に続き、アルバイト先からの収入の回復が見込めないなど、就学継続に困難を抱える留学生に対する経済的支援を目的とした留学生緊急支援金を行いました。今年度は当財団の大学院奨学金の指定大学24校を通じて募集を行いました。助成審査委員会では、支給要件や支援金の使用目的について確認を行い、23名の学生に支援金総額460万円を交付しました。

## カンボジア オンラインスタディツアー

2014年より(公社)日本ユネスコ協会連盟と当財団で共催している「高校生カンボジアスタディツアー」。昨年1月に引き続き、2021年8月21日(土)に当財団協賛によるオンラインスタディツアーを行いました。

今年度もかめのり財団の協賛により、ユネスコスクール14校(約200名)の高校生を対象として、標記ツアーをオンラインで実施いたしました。

本ツアーは2部構成で進行されました。第1部では、参加者がカンボジア事務所のプッタ所長から話を聞いたり、寺子屋\*の学習者たちと双方向で質問やクイズを出しあったりして、交流を深めました。プッタ所長からは、「勉強そのものも大切だが、学習者が将来自立できるようにという視点で活動を行っている」という話があり、高校生らは真剣な表情で画面を見つめていました。

現地寺子屋との中継では、学習者から「日本では、どんな食べ物や場所が有名なのか」という質問があり、高校生は「寿司」や「日本の城」など、自国の魅力を懸命に伝えていました。日本からの質問は多岐にわたりましたが、学習者たちは「寺子屋で1番楽しいことは、友達に会うこと。大変なのは、字を読むこと」「寺子屋の図書館で

本を読む時間が好き」など、各々の気持ちをもっとすぐに届けてくれました。クイズタイムは、高校生と学習者が両国の文化や地理について3択問題を出しあい、和やかな雰囲気が進められました。また、これらの中継では、リアルタイムでチャットや口頭での質問を受けつけていましたが、高校生からは、司会者が拾いきれないくらい多くの質問が寄せられ、学びに対する積極的な姿勢が見られました。

第2部では、寺子屋学習者の家庭を訪問した後、参加校同士で意見を交換しました。自宅訪問では、小学校レベルのクラスで学ぶソムアンさん(14歳)に、家族と生活している手作りの住居や家畜のアヒル、家事仕事といった実際の暮らしぶりを紹介してもらいました。カンボジアの農村の生活様式は、多くの参加者の興味をひき、「トイレはどこですか」「家電はないのか」「防犯対策は」といった素朴な質問が絶えませんでした。ツアー後

のアンケートでも、「家に穴が開いていたり、トイレがなかったりと、とても衝撃的だった」「お互いに協力し合って生活する姿勢に感銘をうけた」「家について、不便だとかひとつも悪いことを言っていなかったのが印象的だった」といった感想が多数寄せられました。15分程度のオンライン訪問でしたが、高校生は多くを感じたようです。

参加校同士の意見交換では、各学校で「本ツアーを通して学んだこと・これからの私たちにできること」というテーマについて話し合い、全体で意見を共有しました。「温かいお風呂に入ったり、学校で勉強したりすることは当たり前ではなく、とても有難いことなのだと感じた」という率直な感想から、「世界の現状を同世代の若者に伝えていきたい」「同世代と交流することで、自分にはなかったアイデアを知ることができ、視野が広がった」といったコメントまで、多様な意見が活発に飛び交いました。また、自分たちにできることとして、高校でのボランティア活動の取り組みを例とした話し合いや、寺子屋リーフレット制作プロジェクトの紹介なども行われました。

カンボジアではツアー1週間前まで一部地域でロックダウンの措置がとられており、直前まで開催そのものが危ぶまれていましたが、貴重な学びの場が実現したことに、感謝するばかりです。なお、司会進行は、今年1月のオンラインツアーと同様に、2019年度開催「第6回高校生カンボジアスタディツアー」参加者らが担当。現地を実際に訪れた「先輩」として、今回も熱い思いを同世代の仲間たちへ届けてくれました。コロナ禍という状況において、本ツアー開催の意義を信じ支えてくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

\*寺子屋とは：日本ユネスコ協会連盟の教育支援「世界寺子屋運動」で、主に読み書きや職業訓練を提供する学びの場。学校と異なり、全世代の地域住民が対象となる。

写真：①寺子屋 ②③⑤日本の参加校 ④カンボジア事務所のプッタ所長 ⑥⑦⑧ソムアンさん自宅訪問

報告：公益社団法人日本ユネスコ協会連盟  
第一事業部 香渡里沙



当日は、YouTubeでもライブ配信を行い、50名以上の方にご視聴いただきました。配信映像は、QRコードよりご覧ください。

<https://youtu.be/i-74zwLu188>

## 寄稿

# 非営利組織評価センター (JCNE) による第三者評価システムのご紹介

「非営利組織の信頼を評価で応援！」ガバナンスの改善と信頼性の向上に取り組み、持続的な組織運営を目指している非営利組織のための組織基盤強化ツールをご紹介します。

チャリティの歴史が長い諸外国では、第三者である民間の評価機関が寄付を受けて活動する団体の運営状況を評価認証し、結果を公開しています。日本でも団体数の増加や公益活動に対する社会ニーズの高まりなどから、同様の非営利組織の評価の必要性が論じられてきました。市民主体の非営利組織が活躍する市民社会づくりのために、行政による管理監督ではなく、民間セクター自らが組織の運営を確認する仕組みも求められています。

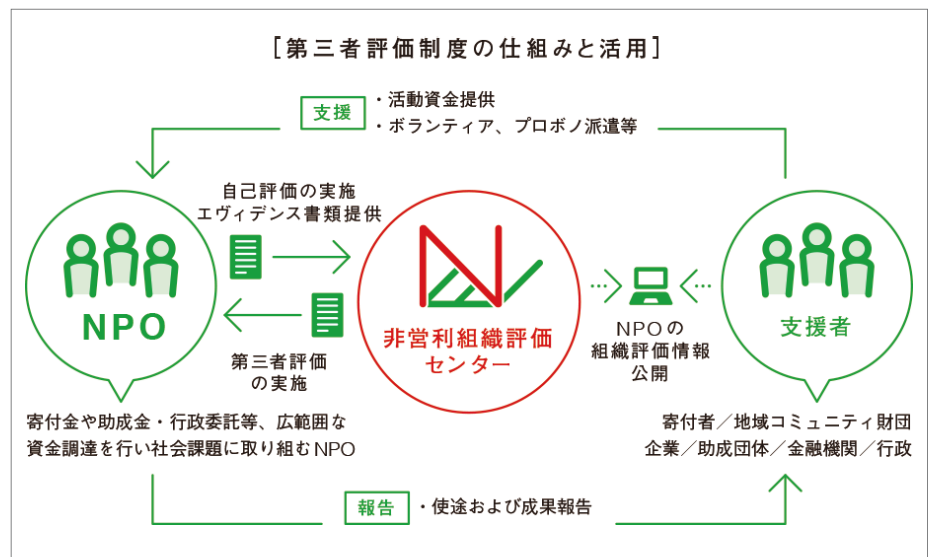
2016年4月、助成財団やコミュニティ財団、NPOセンター、中間支援組織等のご支援・ご賛同をいただき、全国の非営利組織の評価を行うことで信頼できる組織の情報を広く社会に発信し、支援環境の充実に寄与するために、(一財)非営利組織評価センター (JCNE) が設立されました。

## JCNE の組織評価・認証制度

JCNE では、法人格のある非営利組織を対象にベーシックガバナンスチェック、グッドガバナンス認証という2つの評価・認証制度を運営しています。

ベーシックガバナンスチェックは、法令・定款通りに組織運営を行っているかどうかを評価するものです。団体からの提出書類に基づく第三者書面評価と、団体自ら実施の有無を確認するセルフチェックを組み合わせて実施しています。①ガバナンス、②情報公開、③組織の目的と事業の実施、④コンプライアンス、⑤事務局運営という、団体が自らアピールしづらい組織運営の5つの分野において、その運営状況を評価します。2021年8月末の時点で、500以上の団体が評価申込を行い、約270団体が評価結果を公開しています。

グッドガバナンス認証は、①ニーズに基づいた事業や組織運営、②市民参加と連携・協働、③団体の社会的責任、④ガバナンスという4つの観点に基づく評価基準によるアドバンス評価を行った上で、全ての基準を満たした団体に対して外部有識者からなる認証委員会の審査を経て認証を付与する制度です。この評価では、活動・組織運営のプロセスがしっかり出来ているかど



うかを団体からの提出書類に基づく書面評価と評価員が団体を訪問してヒアリングを行う訪問評価 (新型コロナのため、現在はオンラインで実施中) から成り立っています。

グッドガバナンス認証団体には認証マークが提供されます。認証制度は非営利組織の信頼性が見える化し、評価の仕組みで社会課題の解決をサポートするものです。行政との協働事業や企業のCSR活動と団体をつなげる他に、ボランティア募集やスタッフ採用などの人材雇用の面でもその活用が期待されています。支援機関がこれまで負担に感じていた複雑な団体審査を軽減し、また遺贈や寄付、ふるさと納税等の新しい資金流通の仕組みとも連動した活用が可能です。

## 非営利組織における組織評価の活用

JCNE の組織評価は、社会課題の解決に挑む非営利組織により多くの支援が届く環境づくりを目指し、NPO の運営や評価に精通する研究者と実践者の協力を得て開発しました。評価といっても「できていないところを探す」ものではなく、「順位付け」でもありません。JCNE による評価に先立って行う自己評価プロセスや JCNE からの改善ポイント付きの評価結果は、組織運営の改善のきっかけとなります。ガバナ

ンスなどの状況について役職員間で認識が共有され、改善すべき事柄が明確になります。組織評価の結果は、組織の運営状況の診断であり、組織基盤強化に活用できるものです。

団体ごとに作成される評価結果ページは、SNS やブログ等でご案内いただくなど、団体のアピールにも活用できます。グッドガバナンス認証マークは名刺やパンフレット、Web サイト等に掲載することで、信頼性をアピールするツールとなります。組織の運営をきちんと行っているという、第三者による客観的な評価は、広く社会に信頼性を伝えることができるコミュニケーション手法となるでしょう。

そして、寄付者や企業、助成財団等の支援者にとっては、支援先団体を選ぶ時の指標の一つとして活用されるように、JCNE として現在制度の普及に取り組んでいます。助成金申請書で組織評価の実績を確認する項目を新たに追加している助成プログラムも14機関27助成プログラムと増えています。また、評価を受ける非営利組織に対しては、現在普及期間のため、無料で評価を実施しています。お申込み等の詳細はHPをご覧ください。

非営利組織のみならず、ガバナンスのための『健康診断』として組織評価を活用してみませんか。

一般財団法人非営利組織評価センター 業務執行理事 山田 泰久

## インタビュー

# 多様な価値観を受け入れる新しい社会作りのために

## 一般財団法人 非営利組織評価センター 業務執行理事 山田 泰久 氏

聞き手：公益財団法人 かめのり財団 理事・事務局長 西田 浩子

非営利組織の第三者評価システムの紹介記事をお寄せいただいた、(一財)非営利組織評価センター業務執行理事の山田泰久氏に、この制度の導入準備から活用方法、そして今後非営利組織が目指すべき方向についてなど、お話をうかがいました。

### リアルな人生を垣間見ることを仕事に

**西田：** 非営利組織評価センター（以下、JCNE）が設計、実施する評価・認証制度について、JCNEの山田泰久さんにご紹介いただきました。このインタビューでは、制度導入までのお話や活用方法など具体的にお聞きします。

まず山田さんの略歴をうかがいます。大学でのご専門や、その後の日本財団でのお仕事について教えてください。

**山田：** 大学時代はフランス文学を通じて、人の人生を垣間見るようなことを勉強していました。社会ではリアルな人生にも触れたいと考え、日本財団に入りました。社会的な支援活動であれば、それができるかも知れないと思ったのです。

最初に配属されたのは国際協力グループでしたが、帰国子女や海外留学経験者ばかりの中、英語が苦手なまま仕事をしていました。その後、総務企画や採用、福祉関係の施設を作るための助成金の担当を経て、CANPAN（\*1 <https://fields.canpan.info/>）の担当になりました。

CANPANは、正式名称を「公益コミュニティサイト CANPAN」と言って、様々なNPOがそこで情報発信を行い、それを見た企業や一般市民がNPOを支援するという、「応援サイクル」を回す目的で2005年に作られたものです。ちょうどインターネットが一般的になってきた時期で、運用が進むうちに、CANPAN上で情報を積極的に発信すればするほど、支援が行き届くという状況が生まれました。ネット上で情報を見つけられるかどうか、今はとても重要になっています。同時に、社会問題の当事者側の方々も、NPOが持つ専門的な情報やノウハウを求めていることが分かり、情報発信の需要や必要性が覚えてきました。

**西田：** NPOは寄付や助成、税制の優遇などを受けて活動を行うので、事業の目的どおりに予算を使っているかを公開し、活動内容を公開・発信することはとても大切ですね。

**山田：** NPOと言っても、寄付者からお金を託される場合もあれば、障がいのある方が働く場所を託されたり、ボランティアの志を託されて活動するなど、様々です。支援者から思いを「託されている」ということや、ガバナンスが外から見えにくいことを、NPO自身が常に意識する必要がありますと思います。

### 託されるための仕組みづくり

**西田：** 支援者から「託してもらおう」ためには、組織評価が重要になってきます。ここで、JCNE設立の経緯と目的を教えてください。

**山田：** 日本でもNPOの組織評価が必要との声が上がるとなり、2014年頃より評価制度の検討委員会が立ち上がり、その後の準備委員会を経て、2016年にJCNEが設立されました。僕はその時に業務執行理事に就任しました。

その頃、国内のNPO数が非常に増え、玉石混交で、活動や組織運営の様子が一般の人に伝わりにくくなっている状況の中で、適切な支援がNPOに行き届くためには、どの団体が信頼できるのかが明確に分かる「信頼情報」を流通させる必要があると考えました。そこで、組織評価による「信頼情報」を支援者の方々に届けて、判断してもらおう仕組みを作るために立ち上がったのが、JCNEです。

ところが実際に始めてみると、ガバナンスについて高い意識を持った団体があまり多くないことが分かりました。そこで、「ベーシックガバナンスチェック」による組織評価で「信頼情報」を確認する一方で、ガバナンスの意識向上や改善を進める「グッドガバナンス認証」の取り組みを同時に行うことにしました。我々が評価を通じてサポートしながらNPOのガバナンスを改善し、持続的な組織運営体制が整った団体に認証を与えることで、「信頼」を目に見えかたちで一般の皆さんへお届けするという仕組みです。

**西田：** ベーシックガバナンスチェックは23項目、グッドガバナンス認証には27項目の評価基準がありますが、これはどのように決めたのですか。

**山田：** 海外の評価機関の基準なども参考にしながら、日本の状況を見て評価基準を作りました。団体側で白黒つけて判断できる項目にまとめ、同時に評価として活用可能なものになっています。

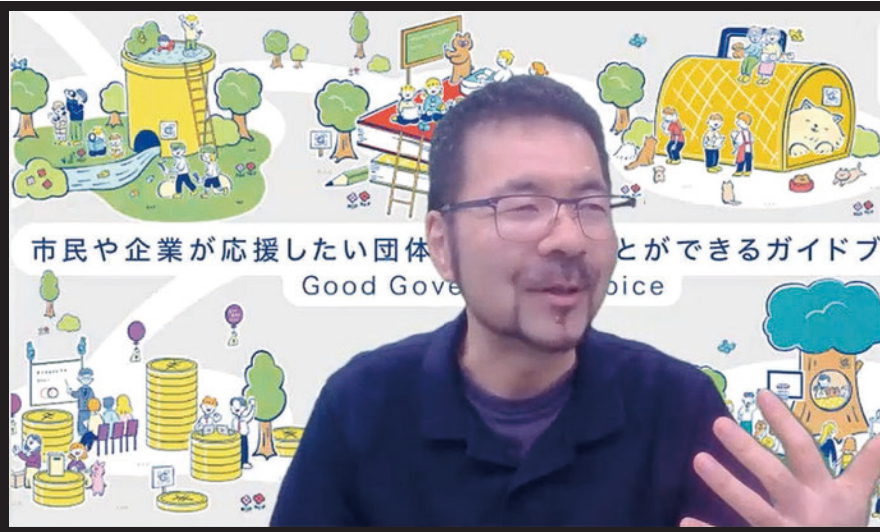
### 外部の視点を取り込むツールとして活用

**西田：** この制度は元々、NPO法人や一般社団法人向けに作られたというお話でしたが、我々のように内閣府や都道府県から「公益認定」を受けている公益法人が、この評価制度を使うメリットを教えてください。

**山田：** 公益認定ではガバナンスが法律や定款通りに行われているかどうかを見ていますが、JCNEの基準では、世間の目や支援者側から見て適切に事業運営できているかというところを見ています。事業のプロセス、ボランティアや寄付の受け入れについても網羅しているほか、労務関係も細かく見ていて、コンプライアンスや職員に対する適切な対応も必要です。ですので、そうした一般社会からの視点を取り入れるツールとして使うことができると思います。

**西田：** 公益法人がグッドガバナンス認証を取れば、組織面でも事業面でもきちんとした優れた法人だとアピールできるわけですね。

**山田：** 事業面では、ニーズに基づいた活動を行っているかどうか確認しています。ニーズ自体がどんどん変わっていくので、ニーズに基づく変革をしていく姿勢は本当に大事だと考えます。PDCAサイクル（\*2 Plan 計画⇒Do 実行⇒Check 評価⇒Action 改善）を回して改善していくプロセスも盛り込んで、より良い成果を出していく体制になっていくかというのも重要な点です。



### 山田 泰久氏

一般財団法人非営利組織評価センター 業務執行理事  
1996年日本財団に入会。2009年から公益コミュニティサイト「CANPAN」の担当としてNPO支援に取り組む。2016年JCNEの設立とともに現職、非営利組織の組織評価・認証制度の普及に取り組んでいる。

非営利組織評価センターHP <https://jcne.or.jp/>

## 助成財団は課題発見の場

**西田:** 我々も常にニーズをとらえ、今後どういふことをやっていくべきか意識しながら活動をしなさいといけないと思いつつも、なかなかそこまで手が回っていないというのが現状です。

**山田:** 事業の中にニーズに触れる機会自体はあるのですが、しくみ化されていないとか、無意識のままということがよくあります。それでもある程度事業に反映されているはずなので、意識するだけでも違います。例えば助成財団の場合、助成金の申請書から社会の変化の兆しを知ることができるので、恵まれていると言えます。僕が日本財団で助成の担当をしていた時も、申請書から変化を感じ取って、助成金の方向性に反映していました。

**西田:** 助成事業は他の事業より変化をつけやすく、私自身も学ぶことも多いのですが、一方で課題があまりに多く、どこにプライオリティを置くべきか当惑している状況があります。

**山田:** それもまた、助成財団にいるからこそ分かることですね。日常では気が付かない、知ることができない問題や課題が、助成財団にはたくさん集まってきて、その最先端を知ることができる。冒頭でお話した、文学から助成財団を目指した理由のひとつがそれです。本でしか知らないようなことが、リアルに見える現場だと言えます。

## カリスマリーダーからの脱却を目指せ

**西田:** 我々もこの評価・認証制度を事業の中で活用したいと思うのですが、助成事業ではどの

ような活用方法が考えられますか。

**山田:** 例えば、評価対象となるNPO団体が、新しい時代の価値観に合う組織になっているかどうかを助成審査の中で見るときに、この制度を活用することができます。少し前までは、NPOでは強いリーダーシップが求められていました。カリスマ的に引っ張ってくれるリーダーがいるところがいい事業をやっているという側面が実際ありました。でも今の時代、強権的なリーダーシップは、必ずしも適正な組織運営ではなくなっています。パワハラの問題とも無関係ではありません。今重要視されるのは、多様な価値観が入る仕組みを持ったコミュニティ型の組織になっているかどうかだと考えています。これは実際にヒアリングや評価をしてNPOの多様な組織運営の状況を聞くことで明確に見えてきた、今後のあるべき組織の姿でもあります。

## 「信頼」は価値観を映し出す鏡

**西田:** 実際にこの制度を5年間実施して、NPOのガバナンスへの意識変化は見られましたか。また今後の課題はありますか。

**山田:** NPOのガバナンスの向上については、少しずつ理解が進んできたと思います。今年度JCNEでは、監事の方々に実際にどんな監事監査をしているのかアンケートを取り、ガバナンスに関する監事のハンドブックを作ってネットで公開しています（※3「NPOの監事ハンドブック」はJCNEのHPより閲覧・ダウンロード可能）。また、太田達男理事長（※4 JCNE理事長、(公財)公益法人協会会長）によるガバナンス講座を月1回実施していて、ガバナンスを学ぶ機会も少しずつ提供しています。

今の課題は、「信頼性」についてです。よく企業の方々から「信頼できるNPOを教えてください」と言われるのですが、それに対して「信頼できるNPOとは何ですか」と聞くと皆さん答えがない。実は「信頼」って、自分の持っている価値観と合っているかどうかかなんですよね。だから自分がどんなNPOを支援したいかという価値観が、先に明確になっている必要がある。「信頼」は、自分を映す鏡なのだと思います。ですので、皆さんが「信頼できるNPO」と言った時に、どんなNPOなのかちゃんと思いつけるようになるようなことを、これから手掛けていきたいと思っています。

## コミュニティ型組織を先駆けて

**西田:** 最後になりましたが、山田さんがこれからの非営利組織に期待することは何でしょうか。

**山田:** やはり、多様な価値観を受け入れるコミュニティ型の組織づくりを、一般企業に先駆けて実践できることだと思います。今後の社会を成り立たせるためにも、そういった価値観や仕組みを他の組織やセクターへ提供していくということが、今後のNPOの大きな役割になっていくと思います。

**西田:** JCNEの評価システムが目指す方向性でもありますね。今問われている非営利組織の在り方について、今日は多くの気づきがありました。ありがとうございました。

## 中学生・高校生日本語ビデオコンテスト

(独)国際交流基金のベトナム日本文化交流センターとの共催事業として、「中学生・高校生日本語ビデオコンテスト」を実施しました。2021年5月31日より約1カ月間、ビデオ作品の募集を行い、多数の応募の中から入賞者が決定しました。

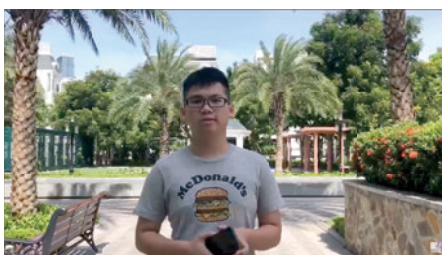
国際交流基金ベトナム日本文化交流センターは、過去にかめのり財団とともに、日本語を学ぶ中高生向けのイベントを数多く実施してきましたが、新型コロナウイルスの影響があるなかでも在宅かつ個人で気軽に参加できるイベントとして、今年初めて、「日本語ビデオコンテスト」を共同で開催しました。中高生が日本語を学ぶモチベーションを維持・向上するとともに、今の時代に必要とされる創造力、クリティカルシンキング、ICTを使いこなす能力等の育成の一助となることを目指したものです。ベトナム全国の中高生から259の個性豊かな素晴らしい作品が集まり、8月29日には入賞者計16名を対象に、オンライン表彰式を実施しました。

中学生部門のテーマは「私の大切な物」、高校生部門は「好きな本」で、応募者は大切な物や本について紹介をするほか、なぜ自分はそれを好きなのか、どのような思い出があるのか、といった自身の経験も含めて、学習中の日本語と個人的な映像で表現しました。自身が画面に向かって日本語を話すことにとどまらず、ピアノを演奏する、イラストを描いて映す、カラフルな日本語テロップを入れるなど、楽しい工夫を凝らした作品が多く見られました。日本語の流ちょうさだけでなく、構成や独創性といった様々な要素から評価するこのコンテスト。審査員はみな、優劣のつけがたい多くの力作を前にして頭を悩ませました。

表彰式は、入賞者も視聴者も自宅から参加するオンライン形式で行いました。「入賞者」とだけ知らされて参加した16名は、式の中で自身の賞(順位)を発表されると、驚きや喜びの表情を画面いっぱいに見せてくれました。司会からコメントを求められた際の日本語での受け応えは、堂々として自信に満ちていました。また、この表彰式は家族や友人、教育関係者の方々も気軽に参加できるウェビナー形式(大人数がオンラインで集まる



【中学生部門1位】 グエン ホアントゥアンさん  
『ペンギンのペンちゃんー僕の勉強における可愛いチアリーダー』



【中学生部門 かめのり財団賞】 ファム スイ カンさん  
『そふからのたいせつなもの』

ことが出来るシステム)としたことで、別々の場所にいながらも多くの人と一緒に喜びを分かち合える場となり、本事業の面白さや意義を共有することができました。

ベトナムでは現在も、新型コロナウイルスの影響により、対面授業を実施できていない学校もあります。また、訪日プログラムや他国の日本語学習者との交流事業を再開できるのはもう少し先となりそうです。そうしたなかでも今回のコンテストを通じ、中高生のみなさんの日々が少しでも彩られ、日本語の面白さを感じて学習を継続したいと思えたようであれば幸いに思います。日本語を学ぶみなさんと、次は対面でお会いできることを楽しみにしています。最後に、本コンテストの実現にご協力くださったすべての方々へ心より感謝申し上げます。

報告：国際交流基金ベトナム日本文化交流センター 山村 陽子



【高校生部門1位】 ファム ビック フオンさん  
『私の好きな本「おおかみこどもの雨と雪」』



【高校生部門 かめのり財団賞】 レ ウェン タオ リンさん  
『私の好きな本』



表彰の様子 ファム ビック フオンさん



国際交流基金ベトナム  
日本文化交流センター  
HP

ビデオコンテストの  
入賞作結果とその作品を  
YouTubeで見ることができます。

発行人 / 西田 浩子 編集 / 谷本 知子 デザイン / イワブチサトシ (BUTI design) 印刷 / 佐伯印刷株式会社



日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します！

公益財団法人 **かめのり財団** The Kamenori Foundation

〒102-0083 東京都千代田区麹町5-5 ベルビュー麹町1階

TEL : 03-3234-1694 FAX : 03-3234-1603

E-mail : info@kamenori.jp URL : https://www.kamenori.jp/